琵琶機関紙
京絃
第二三二号　京絃社

我が道を行く六十五年（八）

西郷天風

鳳鳴会支部がまだ関口駒井町にある頃、門下の一人に、女子大学と目白駅との中間にあった写真館の主人がいた。私も写真が好きなので度々遊びにゆくうち、いつしか其処の写真修整技師に収まることになってしまった。というのは、前述の花房写真製版所に居った頃、花房氏から当時米国で流行の修整術を習っていたのが役に立った訳だが、館主の立場から見れば琵琶の師範代が手元に居ることがどれ程好都合であることか、従って家族ぐるみの優遇である。殊に私がこの写真館に来た頃から、急に女子大生の客が多くなったとの理由で、館主の母堂の如きは私を福の神の入来とばかりに甚だ鄭重な扱い方だった。亦私も花房製版所客員からこの写真館の技師として転住し、ここから週二回満留鳳南先生の許へ通うこととなり、週末には琵琶を楽しむため花房家へ伺候する事になった。ところが好事魔多しとか、この写真館より女子大学へ数分の距離の所に、南谷という人形町の瀬戸物問屋の息子が豪華な写場を建築し、やがて女子大生目当てに写真営業の気構えを見せながら、主人自ら時折遊びに来ては引伸器や三脚などを借りて行く。此家の人々は商売敵きと見ながらも、客商売の弱身からいつも愛想よくあしらっていたが、遂に琵琶を求めたからとて私を招くほど厚顔しくなってしまった。

こうなると心穏やかならぬのはこの家の人達であるが、そういう時の人情の機微に疎い私は平気で頻繁に往復するうち、或る日、それは四月の半ばだったろう、南谷氏の新妻からその母校である血桜小学校の開校記念祭に、琵琶の演奏を、と詢に好条件で頼まれた。この時に至って初めて私はこの家の人達の感情只ならぬ心境を知った。しかしもう其時は既に遅し、万事窮すで是以上この家に止まるべきでない事を覚り、血桜小学校の演奏後そのまゝ上州館林の兄の許へと走り、爾来東京を久しく離れることになってしまった。

当時兄は一ツ橋高商の二年ばかり先輩で正田家の一族である星野唯三氏にかわれ、館林の日清製粉会社に入社し、駅前松本氏の離れ屋に住んでいたのでそこに居候然と収まり、東京を去った後のやる瀬なさを味わっていた。

しかし田舎の春はまことに麗かである、殊にこの離れ屋は明け放された座敷の椽先から内庭を隔てゝ、二メートル程低い田蒲が遥か彼方の森まで続き、右手の杉林との間から小高い土手が、一直線に駅構内へと突込んで来ているのは、云わずと知れた鉄道線路、そこを三時間位の間隔で東京からの下り列車が、煙を吐きながらスルスルとやって来る風景は、子供ならずとも楽しい眺めである。

そうした大都会では味わえぬ魅力もあってか、独身の兄の許での食客生活も青春の身には喜びを与え、夢うつゝの内に三ケ月も過ぎ、学校の土用休みも近づいた或日、突然満留先生の門人で私も一ケ年余り代稽古に当ってやった一人の学生が遥々訪ねて来た。正田茂三郎君である。

彼は早稲田実業学校の学生で、勉学の傍ら熱心に琵琶を習っている頼母しいところがあり、特別に親しくはしていたものゝ、私が館林に来たことなど知る筈がないのにどうした事かと尋ねてみれば、その答はなんと、この館林町の産で駅に近い谷越町に荒物商を営む正田宇平氏の息子とのこと、格別私を慕って来た訳ではなかったのであった。

正田家は此地方きっての名門、貴族院議員正田貞一郎氏の一族、と云えば即ち、美智子

三浦蓮水女史一水会神戸支部長に就任

前支部長蔵本司水氏逝去に伴い三浦女史が今般後任支部長に推挙された。従って支部事務所は西宮市羽衣町七ノ三四（電話西宮三三ー五八八七番）となった。

富士テレビに鶴田錦史氏出演

八月二十九日午前十時富士TV（関西TV）小川宏ショーに鶴田氏が「甦った琵琶」の題名で『本能寺』の一節を弾奏放映し琵琶音楽の良さを一般に認識せしめた。

青柳吉之助 琵琶史劇と舞踊会

日本精神を舞台芸能に表現する首記が九月六日（木）午前十一時から東京日本橋の三越劇場に於て開催され鈴木流泉（龍の口）、押川旭葉（西郷隆盛）両氏独演の外、日本舞踊詩吟舞、講談など三十四番が披露されその内琵琶舞熊谷入道、琵琶史劇南部坂雪の別れ、日蓮劇百座説法に井坂旭良、佐藤旭天紅、木村旭桂、小島旭清の四氏が琵琶及び詩吟で共演して好評を博し五時閉会した。

蔵本司水氏

錦心流一水会神戸支部長の同氏（本名一司）はかねて病気療養中のところ八月二十七日午前一時十分心不全のため神戸掖済会病院に於て逝去。享年七十五。

氏は大正五年吉田豊水氏に入門、後に雨宮薫水氏に師事し七年五月教師免許、関東大震災を契機に神戸市に移住し一水会大阪支部の開設に奔走してその副支部長となり、昭和四年総伝。その後阪神会員の増加に伴い神戸支部を設立して支部長に就任し幾多の出藍弟子を世に送った関西錦心流の第一人者で、温厚懇実の誉高くその演奏振りは実に美事であり絃歌共に正確、上品の一語に尽きた。

去る五月十一日最愛の夫人に先立たれ漸くその百ケ日が済んだばかりで今又此の訃に接し真に哀悼の極みである。葬儀は二十九日兵庫区荒田町の宝喜院で厳粛に営まれ琵琶諸団体その他からの供華弔花は式場に溢れ京阪神を始め各地琵琶関係者や一般人ら多数会葬焼香して永別を惜しんだ。謹んで御冥福を祈る。

小林捷捨氏

薩摩琵琶四明会員の同氏は薬石効なく八月九日逝去。享年八十三。青年の頃から児玉天南氏に師事し豪快な芸風で斯界の発展に貢献された。謹んで哀悼す。

（予告）

○…筑前琵琶旭会全国大会　九月二十九、三十の両日、金沢市能楽堂

○…筑前琵琶橘会関西支部全国大会　九月三十日、彦根市々民会館

○…京都琵琶協会十月定例茶話会　十月六日（土）午後一時、会員平井春嶺氏宅

○…兵庫県文化祭琵琶演奏会　十月十三日（土）午後一時伊丹市公会堂、神港旭会、神戸旭会、一水会神戸支部の三団体が協賛

○…浅野晴風会秋季演奏大会　十月十四日（日）午後一時東京都中野区公会堂

○…一水会京都支部演奏会　十月十四日（日）午後一時京都東山区本妙寺本堂

○…日本琵琶振興会十月定例会　十月二十八日（日）午後一時東京新宿洲鳳会館

○…三浦蓮水会秋季演奏大会　十月二十八日（日）午後一時西宮市公民館松下ホール

あとがき

から梅雨に続いて八月中旬から九月初めにかけて連日三十六度以上の猛暑残暑に加え全国的の水ききんで今年の夏は文字通りの焦熱地獄に悩まされたが、お蔭で二百十日、二百二十日の厄日も無事に済んで漸く涼風肌に心地よい中秋を迎えた▲茲暫くは思う存分琵琶を楽しむことが出来よう、萩桔梗の花薫る庭前で一天澄み渡った月を仰ぎながら好きな一曲を演奏する心境は琵琶人ならでは味わえぬ醍醐味であろう▲この好季節に各所で演奏会などが盛んに催されて嬉しい事である。創立二十五周年を記念して九月二十三日に開催された京都琵琶協会の「琵琶で聴く戦国物語」と題する大会を始めとして旭会全国大会、橘会全国大会、一水会全国大会その他大小の演奏会が次ぎ次ぎと華々しく開かれて世は将に琵琶天国の感がある▲大変結構なことだが、いつかの京絃紙上で一聴者の声を披露した通り公開の演奏会では演者自らが楽しむ前に、まづ聴者に喜こんで貰うということが先決であり自己満足は禁物、この点は呉れ〴〵も留意して欲しい、と、憎まれ口をちょっとー。

昭和四十八年十月一日発行（非売品）
編集者　植村寞水
発行所　京絃社
〒569　高槻市津之江北町一一ノ二三
電話　〇七二六（八五）六〇五一番

妃殿下の親戚とあって、今日では中々心易く近づきにくい家柄だが、六十年も前の頃は只の商家であり、荒物の外に煙草元売捌を兼業としている家だった。

正田君が訪ねて来た日から数日後、此地方一帯に稀に見る大洪水があり、低地の谷越町は全家屋水浸しとなった。勿論正田君の家も床上浸水と聞いたので早速見舞に行った事が動機となり、彼の両親とも親しく言葉を交し、その混雑の中で、ご汁という味噌汁で夕食を馳走になった。

そんなことがあって間もなく、家主の松本を通じて正田君の両親から招待があったが、それには次のような用件を含んでいた。兼業の煙草元売捌事務を手伝って貰いたいというのである。だが私はまだ東京の生活を捨てた訳ではないのでお断りした。すると今度は兄から此話を引受けてやって呉れぬかと云う。私はこの交渉を兄に話した覚えがないのにどうして知ったのか不審だったが、こゝで初めて知ったのは、松本という家主は日清製粉会社に出入する職人の統領で、正田君の家では松本を通じて兄から説得させるという手に出たのであった。此時初めて正田宇平氏は日清製粉会社々長の一族であることを知り、その会社に勤めている兄の立場を配慮して、この話に応ずることになったが、然し、それには其時代の商店には考えられぬ程の条件をつけた。即ち「執務時間は午前八時から午後四時まで。日曜と祭日は休み。」というのであった。この煙草元売捌の事務一切を担当している主任は、正田家の縁故者とのことだったがこの条件には少なからず当惑したようだ。

元来煙草元売捌というのは専売局の代行機関で、此処では一人の販売人が毎日一台の運搬車にあらゆる煙草類を満載し、管轄内の小売店に卸して廻るのだが、店に戻る時間が大概夕刻の七時頃となり、主任殿は其跡始末を済まさぬ内は自宅に帰れぬ悩みがあり、そこで事務員一人を傭って自分の身体に時間のゆとりが欲しかった。せめて夕食ぐらいは家族達と共にしたい、と洩らしたことがあったが、折角事務員が入社しても彼の生活は一向に好展せず、当てがはづれた訳であった。(未完)

蔵本司水氏を憶う

狂酔亭漫録(第九十四)

古谷竟水

錦心流琵琶界で関西地区の大御所的存在であった蔵本司水氏は、去る八月二十七日七十五歳を一期に逝去された。

近年兎角健康勝れず、永い入院斗病生活後漸く小康を得て退院し、久方振に演奏会にも出演されて短曲乍ら妙技を発揮し、又病気本復の内祝品も配られたので、私等も先づ安心と一息継ぐ間もなく、永年御主人の看病やら時には御主人の不自由な体の人杖ともなり、身心共に貞節を尽された奥様が急逝せられ、そのショックで此世の光明を見失われた司水氏の索寞たる心境は想像するだに御気の毒千萬な状態であった。果して其後病勢はぶり返し遂に今回長逝の悲運に遭遇した。奥様急逝以後僅か百余日後の不幸であった。

大正初期、横浜野毛町に教授所を開いて居られた吉田豊水氏は明治末年から、田村滔水、榎本芝水両師に師事し、永田錦心宗家に彷彿たる美声の持主で、福沢輝水(後の輝錦斐)雨宮薫水等の諸名手の先輩であり、横浜での大家であったが、司水氏も私も此の豊水師の門下であった。其後司水氏は大正震災に遇い現在の神戸へ永住されたのである。

序に記すと現在横須賀を中心に活躍中の、斉藤姝水さんも豊水、薫水両氏の門下であり、従って司水氏や私の妹弟子に当るのである。

司水氏の芸は二十歳位から天才的に巧く、当時は晩年と異りやせ形の粋な姿で、声質も幅の広い艶のある美声で、調子も高く蔭から聞くと松田静水氏と間違う位で、私は司水氏が静水氏に憧憬して真似て居たのではないかと思う程、芝水、薫水の芸風と異って居り、大正八年頃の夏、横浜の琵琶会定席浜港館で坊主頭に絣の単衣で出演した司水氏の龍の口の一曲は非常な好演で耳の底に残っている。

然し晩年の司水氏の芸風は皆様ご承知の如く、薫水系の上に独自の個性が加わり、流暢な節調の語尾の変化ある餘韻の如きは巧緻微妙を極め非常に格調の高いものであった。

病中小康を得られた頃のお便りに、今一度舞台に上り勧進帳の掛合を演り度いが、弁慶役の馬瀬檜水君が先に逝き、どうにもならないので其節には君に弁慶を演って貰いたいとの事で、私は迚も自信は無いが司水氏を激励する為、私はヘタだが一生懸命に勤めましょうと返事し、又其後面会の節にも重ねて話が出たので、完全に元気に成られた時にはキット演りましょうと固く約束したのだが、今は空しい思い出となり淋しい事である。

兎に角司水氏の如き錦心流正統を伝える名手を失った事は、関西の斯界否全国琵琶界の大きな損失と言うべきで、今更返らぬ事乍ら痛恨に堪えない次第である。謹んで司水先生の御冥福を祈るや切である。

赤穂義士の年令

赤穂義士伝を永年に亘り記述して来たが、四十七士の内、五人か八人位の名は通って居るが其他は馴染薄く、殊に年令等は全然判らないので、義士伝を読んでもピンと来ないという一部の声もあり、旁々今回は多少冗長に渉るおそれもあるが、左に之を列記する。

堀部	弥兵衛	金丸	七十六歳
間	喜兵衛	光延	六十八歳
吉田	忠左衛門	兼亮	六十二歳
間瀬	久太夫	正明	六十二歳
村松	喜兵衛	秀直	六十一歳
小野寺	十内	秀和	六十歳
奥田	孫太夫	重盛	五十六歳
原	惣右衛門	元辰	五十五歳
貝賀	弥左衛門	友信	五十三歳
千葉	三郎兵衛	光忠	五十歳
木村	岡右衛門	貞行	四十五歳
大石	内蔵助	良雄	四十四歳
中村	勘助	正辰	四十四歳
菅谷	半之丞	政利	四十三歳
早水	藤左衛門	満堯	三十九歳
前原	伊助	宗房	三十九歳
寺坂	吉右衛門	信行	三十八歳
岡島	八十右衛門	常樹	三十七歳
神崎	与五郎	則休	三十七歳
茅野	和助	常成	三十六歳
片岡	源五右衛門	高房	三十六歳
横川	勘平	宗利	三十六歳
三村	次郎左衛門	包常	三十六歳
潮田	又之丞	高教	三十四歳
赤埴	源蔵	重賢	三十四歳
堀部	安兵衛	武庸	三十三歳
不破	数右衛門	正種	三十三歳
近松	勘六	行重	三十三歳
富森	助右衛門	正因	三十三歳
倉橋	伝介	武行	三十三歳
武林	唯七	隆重	三十二歳
大高	源五	忠雄	三十一歳
吉田	澤右衛門	兼貞	二十八歳
矢田	五郎右衛門	助武	二十八歳
小野寺	幸右衛門	秀富	二十七歳
杉野	十平次	次房	二十七歳
大石	瀬左衛門	信清	二十六歳
村松	三太夫	高直	二十六歳
奥田	貞右衛門	行高	二十五歳
間	十次郎	光興	二十五歳
磯貝	十郎左衛門	正久	二十四歳
岡野	金右衛門	包秀	二十三歳
間	新六	光風	二十三歳
勝田	新左衛門	武堯	二十三歳
間瀬	孫九郎	正辰	二十二歳
矢頭	右衛門七	教兼	十七歳
大石	主税	良金	十六歳

以上四十七士を年令順に記したが内訳は、

七十歳代	一人	六十歳代	五人
五十歳代	四人	四十歳代	四人
三十歳代	十八人	二十歳代	十三人
十歳代	二人	合計	四十七人

(此項終)

平家物語から(上)

祇園精舎の鐘

辻　旭城

昨年八月末、京都琵琶協会から〃琵琶で聴く平家物語〃と題する印刷物が郵送されて来た。それは九月十日午前十一時から京都府立文化芸術会館での〃各流派合同秋季琵琶演奏会〃の招待状で、プログラムによるとこの演奏会の特長は曲目が全部平家物語関係のもの

に限定されているということだった。

案内状にもあったが、平家物語といえば直ぐその冒頭に、「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり、娑羅双樹の花の色、盛者必衰の理りをあらわす……。」が思い浮かぶほど、日本文学の古来より伝わる有名な文句である。

なぜ祇園精舎の鐘の声に諸行無常の響きがあるのか。この点について作家の西道智氏の平家物語抄には、鐘の声はすべて無常の響があるという説を挙げているが、それでは何も祇園精舎の鐘と制限しなくてもいい筈だ。後藤丹治氏の主張によると「祇園精舎の鐘を」いったものと説かれているが、聞くべきものがある。

その祇園精舎の〃無常院〃は現存しているが、洛東に就てあらゆる文献を繙いてみたが鐘については詳らかでない。

祇園図経によると、祇園精舎の鐘は無常院の中の一つの堂にあり、但白銀を以て飾れり、院に八鐘あり、四は銀白、四は頗梨なり。銀鐘は院の四つの角にあり、起てゝ之を置く、頗梨鐘は無常堂の四つの角にあり、其頗鐘は形腰鼓の如し。鼻に一の金崑崙あり。金の獅子に乗じて手に白払を執れり、病僧の気（無常堂には病僧を置くなり）将に大漸せんとするとき、是の金崑崙の口より無常苦空無我を説けり。手に白払を挙ぐれば鐘即ち自ら鳴る。音の中に諸行無常是正滅法生滅滅己寂滅為楽と説く。病僧、音を聞て苦悩即ち除きて清涼の楽を得ること、三昧に入るが如くにして、浄土に往生す。と。

祇園精舎の鐘の声に諸行無常の声がある所以は、祇園精舎の無常堂の鐘が、病僧の臨終に当ってそう鳴るためであったのである。

日本に永い伝統を保つ古典芸能に、朝な夕な心に沁みる琵琶の音により源平の昔を偲び、明日へ生きる心の一つの寄りどころとしていたが、〃祇園精舎の鐘の声の表題が判らないまゝ歳月は流れた。このほど日本仏教を読んで知ることが出来た。

京の都で、さしも栄華を誇った平家一門も時流に乗り切れず、源範頼や義経によって西海に果敢なく散って滅亡した。冥福を祈りつゝ縁故の地を訪ねてみよう。

……安芸の宮島廻れば七里、浦は七浦、七恵比寿……。

朱塗の回廊と、背後に残る樹木の緑が海に浮かび映えるその調和は、古くから日本三景の一つとして広く知られている。いつ厳島神社が建てられたかは明らかでないが、延喜式には名神大社に列しているから、それ以前に建てられたことは確かである。後には安芸一ノ宮として信仰を集め、平清盛が安芸守になってからはその崇敬厚く、社殿の造営、社領の寄進、宝物奉納などして広く世に知られている。その後、後白河法皇、源頼朝、足利尊氏、大内義隆、毛利元就、豊臣秀吉、浅野氏などの造営補修を経て、現在のような規模になったものである。

琵琶歌〃屋島の誉〃の屋島は、高松の東北に海上に突き出た火山台地で、瀬戸内海の展望台として、又源平古戦場として有名なところ。地形学上〃メーサ〃とよばれる特異なその形は、対岸の鷲羽山、金光山からも又船上からもよく見える。山頂は平らで南嶺と北嶺にわかれ、南嶺には古戦場を見下す談古嶺と、弘法大師が修業したという獅子の霊巌屋島寺、水族館、レストセンターがあり、屋島ドライブウェーはケーブル登山口駅から談古霊を廻って屋島寺まで延びている。

一ノ谷合戦で源氏に敗れた平家は、内海の水軍を頼んで四国の屋島に拠った。之を陸上から追繋する源義経方との激しい合戦が〃屋島の戦〃で、始めに平家方に味方した四国水軍の裏切によって平家は大敗し、山口県の壇の浦へ逃れた。この合戦では逆櫓、扇の的、弓流し、継信戦死など幾多のエピソードを生んだ。今も一帯にはその遺蹟、由緒の地が多い。

壇の浦古戦場は、琵琶の曲にあるように源平合戦の哀史を秘めたところで、現在の下関市の東端に当る壇の浦町海岸沖の海上一帯をいう。文治元年（一一八五）春三月、平宗盛を主将とする平家一門は、源義経軍との海上で最後の大決戦を行ったが、武運つたなく敗れ遂に滅亡した。このあたりでとれる平家ガニは、甲羅の形が奇異なところから、平家の怨霊がカニに乗移ってグロテスクな姿になったものと云われている。（未完）

鈴木鉦次郎氏の
美挙、隠徳を讃え

東京の鈴木鉦次郎氏は往年錦心流の小林浄水氏に入門、奥伝・綿水号を許され、後松田静水師に師事し好んでお伽琵琶や滑稽琵琶を演奏して全国的に人気を博した琵琶界の名物男であるが、戦前錦心流水号者協会の設立に奔走して、昭和十五年十月その発会演奏会を東京丸の内の蚕糸会館で開催し、代表的水号者多数が出演して満員の盛況裡に終始した。

これが現在の一水会の前身で、戦後同志と謀って「一水会」の設立に当り、自ら議長となって総会を開き東京に本部を置いて、鈴木氏は松田静水、雨宮薫水両氏と共に顧問となり、会長に谷暉水氏を推し、副会長小山田賞水、理事石坂競水、小池幸水、山口速水、宮原琿水、荻野甲水、熊岡染水、宮内揖水の七氏を選出、鈴木氏は静岡、名古屋、京都、大阪、神戸その他各府県の錦心流有力者を約一年に亘り歴訪して支部設立の賛成承認を得、玆に現在の琵琶界第一大団体を誇る「錦心流一水会」の基礎を造り、之を記念して高価優美な一水会本部の会旗を寄贈したのを始め、総会等の費用など物心両面に亘り総て鈴木氏個人の犠牲に於てあらゆる努力をして斯界の発展に尽したが、翌年本部役員会の席上名誉会長の問題で谷会長と意見が対立して顧問を辞任した。

昭和三十四年病気のため琵琶界第一線から隠退して静養につとめたが、その間、斯界を思う熱意は益々旺盛で、私財を投じて琵琶界の功労者を表彰する案を建て、旭会宗家橘旭翁、錦琵琶宗家水藤錦穣、輝水派宗家福沢立枝氏を始め池上作三、吉水錦翁、雨宮薫水、竹下翠風、桑名洲聖、山元旭錦、田中旭嶺、都錦穂、押田旭窈、原梅水、山崎旭萃、鈴木密水、古田耕水、新谷桂水、望月啞江、戸谷曙水、石坂競水、鈴木誉士諸氏（順不同）の絶大な賛意を得て表彰会を発足し金盃等を贈っていたが、この事が吟詠界でも話題となり、雨宮国風氏その他の斯道有力者からも詩吟人表彰依頼の熱心な希望が出て来たので、玆に組織を改めて「日本芸能顕彰会」を発足、自ら理事長となって直経三〇cmの大金盃から中小金盃、金銀銅メダル、楯、トロフィ等を、琵琶、吟詠界の団体や功労者に贈呈し、その数は既に一千点を超しているという。無論是等は他からの援助は全く無く、総て鈴木氏が莫大な私財を投じて、琵琶界、吟詠会の振興発展に寄与する熱意のほとばしりで、しかもこの事に関して何ら自ら喧伝することもなく黙々としてこの隠徳を積まれているのには只々頭の下がる思いである。

尚戦前鈴木氏が私費で催された演奏会は、全国錦心流演奏会、同人気投票演奏会、若手演奏会、各流派演奏会、女流演奏会など実に三十数回に及び、その都度満員の盛況を呈したと記録に残っている外、幾回かの小会など数えれば枚挙に遑ない。

鈴木氏が琵琶、吟詠会に積まれた数々の功蹟、隠徳に対し、何らかの方法で報恩の一端を表したいという芸の友鈴木社長の発案で、一流名手二十数氏が発起人となり、昭和四十四年十一月一日東京上野の静養軒で感謝会が盛大に開かれ、全国各流派琵琶人約四百人が参加したのは未だ記憶に新たなところである。

その時の発起人は左の通りであった。

浅野晴風、雨宮薫水、伊藤長四郎、稲葉葵水、大舘洲楓、小山田賞水、押田旭窈、新谷桂水、竹下翠風、橘旭翁、辻靖剛、鶴田錦史、福沢立枝、馬瀬檜水、松田静水、望月啞江、山崎旭萃、山元旭錦、吉田旭明、吉水錦翁、水藤錦穣、菅野峰風、鈴木密水、鈴木誉士、（順不同）

好漢鈴木鉦次郎氏、どうか此上とも充分自重して一日も早く元の健康体を取戻し、再び第一線で活躍されるよう念願して止まない。

「五洲会」に寄せて―

早乙女千秋

錦心流の名手大舘洲楓師一門から、この程

また一ツの「琵琶の会」が結成された。－即ち去る八月八日、東京田無市の市民福祉会館に於ける「五洲会」がそれである。

「五洲会」同人の顔ぶれは、大舘派の宿老平井洲誠師を始め桑名洲聖、松崎洲陵、荒川洲帆、それに紅一点の前田洲月さん、以上五人の方々で、とりわけ平井師は私が戦後初めて知己を得た方であり、このところ久しくお逢いしていないので、油照りの七ッ下り、重い足を引きづって西武新宿駅で小一時間余、会場に辿り着いたのは四時近くであった。

－会場の受付け近くで、これまた絶えて久しい松崎洲陵さんとお会いし、一息入れてから同師の案内で二階の楽屋に向う途中、時ならぬ場異い？　な三筋の糸の流れを耳にして〃はて、これは…？〃と、些か不審の念に打たれたが、そのなぞは間もなく判った。

二た部屋ぶッ突きぬきの広い楽屋の片隅で、久しぶりの前田洲月さんが、琵琶ならぬお三味線を膝に愛弟子の宮崎洲香さんに、当日の出し物の琵琶小唄〃唐人お吉〃の稽古をしきりと付けている最中であった。琵琶の会で三味線の音を耳にするのは去る三月の「研精会」以来だが、琵琶と同様、いつ聴いてもよいものである。

－カンカン照りの暑い夏の陽が漸く西に沈みかけた六時過ぎ、五洲会同人各師による発会記念演奏会が開会され、その一番手は平井洲誠師の「川中島」。宛然古武士の風ぼうを有する平井師には打ってつけの出し物とて、甲越両軍が死斗を繰返した川中島に於けるその決戦が、ほうふつとして眼のあたり想い出されるような素晴らしい演奏ぶりで、聴いて実に気持がよい。

が、次の荒川洲帆さんの「白虎隊」は、同人の内で一番若いのに声量、弾法とも何か今一ッ気迫に欠けるものがあった。次回には是非共奮起一番して貰いたいものである。

また、松崎洲陵さんの「吹雪の敵」、桑名洲聖師の「伊豆の御難」は、共にしッとりとした語りと弾法で文句なし、更に続いての紅一点前田洲月さんの「小野訓導」は既に極付きの定評があり、こういうものをやらせては前田さんの外にはあるまい。

このあと、ゲスト出演の若水桜松師の「須磨の敦盛」は是迄にも度々聴いてはいるが、琵琶界屈指の美声の持ち主とて、その一節一節が切々として七・八分入りの聴衆の胸を打ち、さすがに一級品である。

そしてお止めは宗家大舘洲楓師の「西郷隆盛」、短かい時間ではあったが宗家の名に恥じぬ堂々たる演奏振りで、英雄の末路かくも哀し…と、そゞろ一掬の涙を禁じ得ぬものがあり、久しぶりで耳に残る〃逸品〃であった。

外に各派の吟詠や琵琶小唄など二時間近くあったが、之は割愛する。（八月十七日記）

山崎光水氏に錦号授与さる

八月一日附を以て宗家吉水錦翁師より錦号（錦幽）が授与された。山崎氏はかねて児玉弾法に専念し昨年から坂本錦道氏について伴流をも研究を続けて今回の栄誉をかちとられた。

京都三美会の一泊研修懇親旅行

田中鵬水、矢吹華水両人主宰の同会では八月五日から六日にかけて首記開催。両人の外富山、一坊寺、栃原、西村、串田の各会員及びその家族ら合計十三人の一行は四日午後一時半自家用車や近鉄で京都出発、途中晴天続きで水の無い木津川水泳場には人影もなく僅かにその上流で二、三の太公望を見かけながら三時半府下相楽郡加茂町郊外の名刹浄瑠璃寺門前の新築農家々屋に落付き冷たい井戸水で汗を流して一休みの後早速研修開始。夕食には都会人には馴染の薄い新鮮な山菜料理に持参の肉等の罐詰をあしらって美味しく済ませ夜の更けるのも忘れて再び弾歌法のお稽古。

翌日は朝食前の涼しい間にすがすがしい空気を満喫しつゝ浄瑠璃寺に参詣し池に咲く清楚な水蓮の花に暫し見惚れ、食後往復一時間半ほど歩いて道端の有名な笑い地蔵を拝み、楠の大木で造られた大仏像を祭る岩船寺に詣で帰途無人の売店で採りたての水々しいホォヅキ、キューリなどを土産に求め午後は再び旅宿で研修演奏会をして夕食を喫し帰京の途についたが、連日三十六度を超す都心を離れ公害のない田舎での二日間の研修懇親旅行は

此上ない収穫であった。（矢吹華水記）

京都護国神社みたま祭

寺々の鐘が鳴る、盛り場のネオンが消える、京の街が息をひそめる。と、東山の主峰如意ケ嶽に大きな「大」の火文字、続いて東西北の各山腹に左大文字、舟形、鳥居形が点火され、当夜の精霊の送り火に京都人は夏の終りを感じる－。

その八月十六日夜、東山の高台にある霊山（りょうぜん）護国神社では恒例のみたま祭万灯会が府下遺族会と日本民主同志会の協賛で挙行され七時から神社本殿で邦楽邦舞の献奏会が催されて京紘社に琵琶部門の奉納依頼があり京都琵琶協会と協議して錦心流植村寛水（本能寺）、薩摩平井春嶺（小栗栖）、筑前矢吹華水（大楠公）の三曲が神前で謹奏された。外に笛、琴、尺八、舞踊などの奉納が九時過ぎまで続いて御霊を慰め、且遺族や一般来集参詣者を感激せしめた。（U生記）

三ツ和会琵琶研修会の発足

京都琵琶協会員梅原旭濤、矢吹華水、平井春嶺三氏の門下生二十六名発起の合同研修会がこのたび発足しその第一回の集りを八月十一日矢吹女史宅で開催して会名を首記の通り決定したあと種々協議の結果来る十二月二日（日）午後一時から京都東山安井金比羅宮会館で研修演奏会を公開する事が決定した。この会は会長などの堅苦しい役員を置かず飽くまで自主的にそれぞれの流派を研修運営するのを主眼とし、たゞその指導を上記三師が分担することになっている。今後の発展を期待したい。

京都琵琶協会定例茶話会

(1)　八月十二日（日）午後一時から神戸市垂水区舞子町の舞子ヴィラで開催。都心を離れて白砂青松の舞子浜を控え戸外三十六度の猛暑に反して冷房のよく利いた畳敷の大広間に伊吹正陽、田中鵬水、梅原旭濤、矢吹華水、安住旭康、平井春嶺、植村寛水各会員の外、札幌から西下中の広川岳楓氏並びに神戸「琵琶を楽しむ会」の田中歎水、小塩梁水、野尻摂水諸氏も来遊され夕刻まで弾交を楽しんだあと安住女史心尽しのお弁当にビールで乾盃して八時散会した。（演奏者と曲目）田中鵬－大楠公、梅原－衣川、矢吹－隅田川、平井－小敦盛、広川－彰義隊、田中歎－改訂本能寺、小塩－湖水乗切、野尻－坂崎出羽守。当日は六ケ月前から安住女史が会場申込みに奔走され漸く本日の借入れに成功したのに病気や事故等のため協会員の出席率が悪くて折角の例会も些か淋しかったのは誠に残念であった。

(2)　九月八日（土）午後一時から会員平井春嶺氏宅で開催。来る九月二十三日京都府立文化芸術会館での協会創立二十五周年記念大演奏会の準備工作などに全員従事し、二会員の研究演奏後夕食を共にして八時解散した。（出席者）伊吹、戸田、戸倉、田中、梅原、矢吹、安住、牧、古谷、木村、水内、平井、植村。

日本琵琶振興会八月親睦研究会

八月二十六日（日）午後一時－八時東京新宿洲鳳会館。新部桜水－盛綱先陣、木原綾子－大高源吾の二女史の外数氏弾奏のあと　門琵琶の講習会を行った。

琵琶吟道演奏大会

八月二十六日（日）十二時半札幌市大谷会館大ホール。主催北海道神宮琵琶講。東京友吉鶴心師をゲストに迎え盛会裡に八時閉会。中井岳楓－あゝ結城先生、阿部導水－恩讐の彼方、草薙水－シャクシャイン、大友城水－重衡、室谷幹水－父乃木将軍、安達弦水－碧血碑、桧森毅水－本能寺、天野偲水－坂崎出羽守、小林濤水－白虎隊、小野蓉水－屋島の誉、加藤夕水－西郷隆盛、伊藤甦水－羅生門、北尊水－夢、辻林稍水－川中島、友吉鶴心－新撰組、木村長水－曽我兄弟、広川岳楓－彰義隊、山崎紅水－松の廊下、渡辺飛水－舟弁慶、金子天香－耳なし芳一、内山鶴崇－敦盛。外に吟詠、吟舞、剣舞等三十九番

藤巻旭鴻演奏会

八月二十六日（日）午後一時東京千代田区農協ホール、主催旭鴻会（入場料八百円）演奏各曲目の簡単な解説を附記したプログラムを入場者に贈って喜こばれ又新しい試みとして藤巻旭陽構成並に演出、効果池田崇、解説大屋秀夫、薩摩弾き藤巻旭鴻、笛石高琴風各氏によるスライド映写併用の琵琶演奏は効果的で盛況を呈した。玉藻の前－林田旭史・紘旭陽　対王丸－熊手旭宸、藤巻旭彰・紘旭鴻　秋風故郷山（立方笛入）－富樫旭桂・紘旭保、旭清　湖水乗切－輝錦司　大楠公－田中旭昇、浜本旭好　盛綱先陣－新部桜水　若き敦盛（立方笛入）－樋口旭清・紘旭鴻、旭保、旭桂、新琵琶楽荒城の月変奏曲－正紘旭保、旭粧、旭清、旭桂、旭鳳、旭孝、旭史、旭章、旭石、旭昇、旭陽・小紘旭好・大紘旭彰　夜討曽我－吾妻江風　綱館－河野旭保、富樫旭桂、峯旭孝・紘旭粧、旭鳳・小紘旭陽　唐人お吉－藤巻旭鴻　厳島の戦－山崎旭萃　琵琶をスライドで綴る義経の一生（前編）伏見の吹雪、五条橋那須与市、壇の浦－横野旭凰　（後編）大物の浦、安宅の関、衣川－原島旭粧